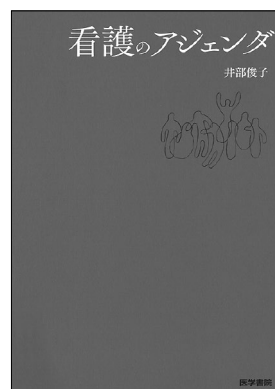


『看護のアジェンダ』

時代とともに歩んだ看護の
変遷と、改めて看護を社会に
発信するヒント集

著：井部俊子／定価：本体 2,500 円＋税
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



本書は著者が11年にわたって「週刊医学界新聞」看護号(医学書院発行)に連載してきた内容をまとめたものである。2005年から書き続けられてきた「看護・医療界の‘いま’を見つめ直し、読み解き、未来に向けた検討課題を提示」してきた内容は、時代とともに看護がどのように変遷をしてきたのかを改めて考えることができる。

本書を読み始めたとき、私はガツンと頭を叩かれたような大きな衝撃を受けた。なぜなら、2～3ページにまとめられている短い文章には、著者の幅広い語彙力、知識、知識に裏付けられた根拠、それらに基づいて導き出された力強いメッセージが散りばめられているからである。正確には、著者が読者に力強いメッセージを伝えるために、著者のもつ膨大な語彙力や知識が駆使されているのかもしれない(これは、著者が本書で「自分の書きたいことおもしろいと感じることを好きなように楽しくすらすら書いていけばそれでいい」という村上春樹氏の言葉を引用した心境とは異なるかもしれないが)。そして、読み物であるはずなのに、明朗な論文を読んでいるような感覚にさえる。

と言っても、本書は堅苦しい言葉で書かれているものではない。その話題は、その時代の最新の情報、臨床での出来事、海外の動向、書籍や映画、著者の経験(私生活を含む)といったものである。そのなかでも、何度も繰り返し取り上げられてい

る内容がある。それは、看護職の役割や特性、多職種との協働、顧客としての患者、看護管理などである。例えば、「人生の価値を問う」看護職の役割として、「10. ぬくもり(2005年10月24日)」では、新聞に投稿されたある記事が取り上げられている。それは、自殺未遂を図った投稿者が看護師とのやり取りを通して新たな希望を見出そうとする内容であった。著者は、その記事の内容に触れ、看護職が毎日淡々とこなしているようにみえる一連の業務において、看護職の心は常に患者と誠実に向き合い、それらが患者・看護職の両者の間に「暗闇を溶かす「光」として伝播されていること、そして、このような偉大な仕事を気負うことなく行っている臨床ナースたちにエールを送りたい、と述べている。これは、本書のほんの一部の内容であるが、他のすべての内容において、著者の看護職としての自負心と私たち看護へのエールが込められているように感じてならない。

そして、特に強く印象に残っているのは、本書の帯にもなっている「看護が社会に認知されないのは、非可視性と可視性の問題ではなく、看護職の発言と沈黙の問題である」という言葉である。本書を読むと、まさに自分が実践してきた看護、大切にしている看護を誰かに語りたくなった。できれば、看護の役割を広く社会に周知する発言として。そんな決意を新たにする1冊であった。